

空襲の中を一人、必死で逃げた 栗田昌之さんの体験



栗田さんの体験も掲載されている作品
春夏秋冬叢書 発行

栗田さんは、昭和20年3月に八町国民学校を卒業した。欲しがりません、勝つまでは」と、楽しみだった修学旅行も中止されてしまっていた。しかし、昭和50年に、同級生たちの強い思いが実現し、「30年ぶりの修学旅行」を行った。

その後も、折に触れて、同級生が会うときは、懐かしい子どもの頃を思い出して語らうことが多い。戦争という激動の中で、共に生きた仲間としてのつながりはとても強い。

6月19日の豊橋空襲のとき、栗田さんは、東八町の2階で寝ていた。家には、父、姉、兄がいた。

警報で目を覚ましたときには、焼夷弾が落とされ始めていたので、すぐにリュックサックと鞆を持って家を飛び出した。姉たちは、どう逃げたのかわからないまま、一人で逃げた。偶然会った同級生と共に、牛川の知人宅で朝ごはんをごちそうになった。その後、現在の石巻小野田町にあった父の知人宅で、荷車を借りたりして、街中へ戻ってきた。自分のうちの焼け跡へ行ったら、父や姉たちも無事で戻っていた。家族全員が無事であったことは、本当に幸運だった。

戦時中の中学校生活

入学したときには、もう先輩たちは、太陽航空とか豊川海軍工廠に学徒動員されていて、学校に来ていなかった。校舎には、入ったばかりの1年生と、病気で軍需工場にいけない先輩が、10人か20人ぐらいいた。また、軍隊が校舎に駐屯して、そこで寝泊りしていた。そのために栗田さんたちは、一つの教室に、2クラスの生徒が詰め込まれ、椅子や机を外に出し、床に座って授業を受けていた。

空襲を受けたり、艦載機による機銃掃射に遭遇したりして、辛い時代ではあったが、それ以外は、子どもなりに楽しみを見つけては、毎日楽しく遊んだことも記憶に残っている。

空襲からの脱出

私の空襲とは、衣食住を一時に失い、家族を離散させられ、その後、田舎に住んでからは、焼け出され、疎開の子」と言われてあざけられた記憶である。

『豊橋空襲体験記』 『あの時の私たち 小学生の体験した戦争』には、生々しい当時の体験が集められている。

恐怖の3時間

B29の襲来を知らせる空襲警報が鳴るたびに、近くの防空壕へ入れてもらいながら、避難できそうな方向へ向かって走り続けた。逃げ惑う人の波でいっぱいの中を、小さな子を連れて逃げるのは、必死であった。途中で履物が脱げてしまい、裸足になってしまったことにも気づかないほどであった。

人の心は「鬼」になる

踏み切りの線路の溝にリヤカーの車輪がはまり、引き出そうとしていた男の人がいた。リヤカーには、おばあさんが布団にくるまってうつむいていた。それを見ても、誰一人助ける者はいなかった。私も母の手にすがって逃げた。本当に地獄そのものだった。

疎開しても

教科書も紙も鉛筆も、ランドセルもあるはずがなく、母が布製のバッグを作ってくれた。履物は祖父の手作りのわらぞうりで、往復2時間も歩くので、家に帰り着く頃には、半分ほどにすり切れていた。わらじ作りが祖父の日課だった。疎開先では、よそ者には冷たいところがあった。知り合いでなければ、食料となる芋なども分けてもらうことはできなかった。

赤痢までもが

終戦後、赤痢がはやって人々をさらに苦しめた。市民病院に、隔離病棟がなかったため、今の新川小学校が代わりとなったが、赤痢による死亡者も多数でた。

火の海も怖いけれども、生きることが息苦しいような戦時下や、犬畜生にも劣るような生活をしなければ生きてゆけない戦後を思うとき、「戦争はいやだ！」と叫ぶ。



豊橋空襲を語りつくす会 発行



空襲体験を記録する会 発行

米軍による 豊橋空襲の記録

- 20年1月9日 東田町
B29 爆弾26個 33世帯被災 死者0人
- 20年2月15日 向山町・三ノ輪町
B29 爆弾26個 115世帯被災 死者10人
- 20年2月16日 大崎基地北、老津基地北等
グラマン・カーチス 死者あり
- 20年3月 4日 多米町
4月15日 小池町・柳生町
4月30日 山田町・南栄町
5月19日 花田町・中郷町・小池町
- 6月19日 市内全体
焼夷弾 死者624人
- 7月15日 大村町・下五井町

『豊橋空襲体験記』より